

## 「三人の追悼」

2014年11月20日

岩波の月刊誌『世界』の12月号に三人の方を追悼する文章が掲載された。一人は、宇沢弘文氏である。内橋克人氏が「政治的、経済的被災者に寄り添う『宇沢経済学』の神髄」と題して書いている。宇沢氏は日本社会の病理現象について下記のように書いている。「経済学は優れて実践的な面をもつ。経済学者がなにゆえ、経済学に関心をもち、経済学の研究を一生の仕事にしようと決意するのかというと、貧困と分配の問題にその原点をもつことが多い。なにゆえ、ある一つの社会あるいは国のなかで、同じ人間でありながら、一方では貧困に苦しみ、その日その日の食糧にすら不自由する人々が大ぜい存在するとともに、他方では、暖衣飽食、贅沢に飽くことを知らない人々が存在するのであろうか。」市場原理主義至上主義を批判し、貧困と分配の問題に「社会的共通資本」という視点から公正と公平を説いている。それは当然、安倍政権の経済政策について「所得再分配」への政策意思の欠落、「不均衡経済」のリスクへの無関心、「協同組合」への評価の脱落などを批判した。苦難を負っている人々に思いを寄せた経済学を展開した人であった。

二人目は、坂本義和氏である。最上俊樹氏が「『醒めた規範的リアリズム』に寄せて」と題して書いている。坂本氏は軍縮や核廃絶の国際会議で活躍され、その思想は「人間がある国なり社会なりに生まれ落ちたという事実は、人間として本質的平等性を変えるものではない」という背景から来ている。最上氏は、「他者の尊厳に対する感性」の共有を重視することが、坂本氏の思考の原点であり、到達点であったと書いている。そして、旧約聖書の詩編1編1節の「あざける者の座に座らぬ人」と総括している。また、坂本氏に関し体系的な学術書を出すべきであったという批判もあるが、学者だけを対象にした「学術書」を書くことに最大の意味を見出さなくなっていたのではないかと書いている。私は、坂本氏の最後の著作となった『人間と国家』を感銘をもって読んだ。坂本氏の書いたものは明快で、政治や経済に無知な私にも分かり易かった。それは、人間を見据えていたからであろう。最近の論文は状況の説明や解説が多く、その背後にある人間や文化を捉えたものが希薄であるという印象を持つ。

三人目は、土井たか子氏である。保坂展人氏が「人々と共感し、共振し、山を動かす」と題して書いている。社会党委員長だった土井氏は1989年の参議院選挙で大勝した時「山が動いた」と叫んだ。大車輪の活躍だった。しかし社会党は、村山富市氏が自民党に担がれて首相になり、土井氏が衆議院議長になった後は、衰退の一途を辿った。民主党に吸収され、残った民社党は見る影もない。土井氏は「憲法と結婚した」と言っていたように、護憲を生涯の使命とした。保坂氏は、土井氏の演説は「お互いの政治」「お互いの暮らし」「お互いのこのニッポン」と「お互い」を連発したと書いている。土井氏は市民と共にあろうとした政治家であった。

三人を深い哀惜をもって追悼する文章を読み、彼らは市民の側に立って、考え行動し、日本の「宝」のような存在であったことを改めて知らされた。惜しい方々が亡くなれ、残念であるが、彼らの生き方と主張を継承することが求められている。

主イエスは全ての人を、殊に弱い立場に追いやられている人々の生を是認し「生きよ」と語り、その現実を示された。キリスト教は命の尊厳を守り、平和を実現していくことを目指す宗教である。貧富の格差が是正されなければ、社会の荒廃は進み、命が軽視される。平和が保たれなければ、人権は保障されない。このことを肝に命じる時である。